

〈研究ノート〉

## 1950年代のシュタージ拉致・殺人事件

——リンゼとビアレクの場合——

近 藤 潤 三

### はじめに

緊張を強めていた米ソの冷戦が朝鮮半島で火を噴き、一部で熱戦になるほど激化した時期に分断国家として出発したばかりの東ドイツ（DDR）で国家保安省（通称シュタージ）は発足した。建国から1年たった1950年のことである。この时期的な符合だけでも治安機関であるシュタージが冷戦の申し子であることが容易に推察されよう。ただ出発当初は規模も小さく、権限も曖昧だったのに対し、その後は増殖を続け、巨大組織に膨れ上がった。すなわち、1100人で発足したシュタージは初期には内務省に併合されて組織的自立性さえ失ったことがあるのに、DDRが崩壊する頃になると9万人の専従職員と17万人にも及ぶ非公式協力者を擁する巨大な組織に膨張した。また他方では、西側でのスパイ活動と国内での防諜から政治犯の摘発、要人警護、国境検問にまでいたる広範な任務を引き受け、その権限も著しく拡張したのである。

このような発展を念頭に置けば、当初のシュタージと末期のそれを単純に同一視するのが適切ではないのは明白であろう。以下で検討するように、例えばその任務遂行の仕方も初期には暴力的な面が目立ったが、DDRが安定した後半期になると国際世論を刺激することを警戒してソフトな方法に重心が移ったのであり、その点に照らしただけでも、シュタージを論じる場合、一貫性と変化という二重の視座が必要になるといえよう。シュタージ研究者として知られるギーゼケはこうした観点からシュタージの歴史を4期に区分している。1950年までの前史と解体過程に入った1989年以降を除き、1950年から1953年までの創設と建設の時期、1953年から1957年までのヴォルヴェーバーがトップにいた時期、1957年から1971年までの現代的情報機関への改造期、1971年から1989年

までのホーネッカー時代がそれである<sup>1)</sup>。以下ではこの時期区分を参考にしながら1950年代のシュタージの一つの断面に光を当てることにしたい。それはDDR敵対勢力を根絶する活動であり、具体的には近年ようやく真相が明らかになった2人の人物の拉致・殺害という凄惨な出来事である。シュタージは総数で約600人の市民を西ベルリンから拉致したとされており、1950年から1953年の間に170人が西ベルリンで拉致されたり東ベルリンの訪問で消息を絶つかしているが<sup>2)</sup>、その中でも著名なのがリンゼとビアレクの二人である<sup>3)</sup>。そこで悲劇的な死を遂げたこの二人の経歴などを確かめ、事件の概要を描いてみることにしよう。

## 2. ヴァルター・リンゼ

シュタージによって西ベルリンから拉致され殺害された二人に光を当てる際、最初に断っておかなければならないことがある。それは判明している部分が大きいとはいえないことである。

シュタージに関する研究はドイツ統一に伴って文書管理機関が設置されたことを足がかりにして次第に厚みを増してきている。とりわけ被害者や犠牲者の資料が公にされるようになり、驚くべき事実がいくつも明るみに出たことも手伝って関心が持続し、様々な側面からメスが入られるようにもなっている。けれども、拉致・殺害に限るなら、検討は余り進んでいるとはいえないのが実情だといってよいであろう。というのは、ここで取り上げる二人に関しても僅かしか文献は存在せず、その他の人物になると、管見の限りでは著作は皆無に近いからである。リンゼについては1999年にベルリン市のシュタージ文書管理機関から刊行されたマンベルの著作に加え、キルシュのそれが「政治的暴力の犠牲者追憶のためのザクセン州記念館財団」の負託によるシリーズの一冊として2007年に至ってようやく世に送られたにとどまる<sup>4)</sup>。他方、ビアレクに関しては、ヘルムスとノアクの共著が1998年に出版されて以来、関連する著作は現れていないのが現状である<sup>5)</sup>。そのため、現在でもシュタージによる拉致・殺

害の全容は不透明なままであり、「シュタージの犯罪」解明には依然として空白部分が残されているといわねばならない。無論、長らく完全な闇に包まれていたことを思えば、上記の3冊が公刊されたことは大きな前進であるのは間違いない。ここで試みるのは、それらに依拠して二人の経歴を明らかにし、事件を概観することにとどまる。また若干の新聞報道などを除けば、経歴に関するほとんどの記述はそれらに基づいているので、いちいち出所を示すのは差し控えることにする。

まずヴァルター・リンゼから始めよう。

ベルリンのリヒターフェルデ地区にはヴァルター・リンゼ・シュトラッセという名前の通りがある。従来はゲリヒトシュトラッセと称した通りの名前が改称されたのは、ベルリンの壁が作られる直前の1961年6月のことである。この出来事からも分かるように、当時は東西間の緊張が高まっていたが、それを下地にして前線都市ともいえる西ベルリンには強い反共ムードが漂っていた。通りの名称が変わったのは、反共の闘士であり犠牲者でもあったリンゼの功績を讃えるとともに、その犠牲を記憶に刻むためだった。

それから半世紀近い歳月が流れた2007年になって再びリンゼの名前が公の場に登場した。共産主義体制下での不法と取り組んだ功労者に対して賞を授与して表彰することが企画され、これにヴァルター・リンゼ賞と命名する方針が公表されたのである。計画したのは、シュタージの拘置施設だったベルリンのホーエンシェーンハウゼン記念館の支援協会である。けれども、この企画が持ち上がると、強い異論が噴出し、論争が巻き起こった。それにとどまらず、政党までが企画の是非に関して態度表明する事態になり、政治問題化するようになった。例えばSPDは10月5日付の歴史委員会の発表で、表彰の可否ではなく、賞の名付け親としてヴァルター・リンゼは不適当だとして反対した<sup>6)</sup>。また左翼党からは、同党の連邦議会副院内総務レッチュが9月27日に声明を発表し、賞を設けることに反対すると同時に、企画の責任者である記念館の館長で歴史家のクナーベを激しく非難した。ファシズムというDDRの「前史を知る場合にだけDDRの歴史を人は真剣に解明することができるが、クナーベ氏には明

らかにそれができないし、それを望んでもいない。」それゆえに「記念館の館長の職務にクナーベ氏は適しておらず、そのポストを適任の後継者に譲るべきである。」このようにレッチュは公然とクナーベを攻撃したのである<sup>(7)</sup>。

反対論には大きな温度差があるにしても、賞の創設がなぜ政党の関与を招き、政治問題化の様相すら呈するまでになったのであろうか。その主因は、反共の闘士、その闘争の犠牲者という、長く固定していたリンゼの人物像に影の部分があることが浮かび上がったことにある。その影とは、ナチ時代に彼がナチ党員だっただけでなく、その協力者だった過去があるという疑惑である。この疑惑が浮かんだとき、「英雄の墜落」という見出しで2007年9月27日付『ターゲスツァイトウンク』紙が「シュタージの犠牲者として扱われてきた弁護士ヴァルター・リンゼはまたナチ犯罪者だった」と報じたが、ナチ時代のリンゼについての綿密な考証によってそうした疑惑に火をつけたのは、上記のキルシュの著作だった。これにはリンゼをそれまで通り殉教者扱いする立場から予想通り反論が加えられた。例えばケラースホフは2007年8月9日付『ヴェルト』紙に「ヴァルター・リンゼはナチではなかった」という論説を公表し、「モスクワで殺害された反共産主義者は現代史の薄明かりの中に不当にも陥れられた」と主張して怒りを込めて反駁している。そうした展開につき、2007年9月25日付『ヴェルト』紙は「ヴァルター・リンゼに関する歴史家の論争」という見出しをつけ、翌日の『ターゲスシュピーゲル』紙も「著名なスターリンの犠牲者をめぐる論争」という見出しでこの問題を中心にしてリンゼの実像についての論議を伝えている。また2007年12月4日付『ターゲスシュピーゲル』紙は「ヴァルター・リンゼに関する真実」という見出しの記事を掲載し、「SED独裁の犠牲者からどうして悪しきナチが生じたのか。ホーエンシェーンハウゼン記念館は賞に彼の名前を付けようとしている。しかしナチ時代に彼がナチ党員だったことが人の気に障っている」というリードを付している。さらに翌2008年3月29日付の同紙にはM.ガートマンの「未解明の責任問題」と題した長い論説が寄稿され、論議の経過とともに主要な論点が整理されている。

このようにして燃え上がった論戦も1年以上が経過した2008年秋には冷めて

きている。2008年10月22日付『フランクフルター・アルゲマイネ』紙でオットーが伝えるところによれば、同年10月7日にベルリンのシェーネベルク区役所のホールで「ヴァルター・リンゼと歴史的真相との取り組み」をテーマにしたシンポジウムが開催されたが、そこでは「参加者は和らいでいるように見えた」ばかりでなく、「美しい一致」のムードさえ漂っていたからである。「ほぼ1年前には雰囲気は全く違っていた。リンゼ博士は人びとの感情を燃え立たせたのである。」もちろん、論議を包む空気にそうした変化が見られるとしても、半世紀以上も前に死亡したリンゼに関し、これまでの評価について疑問が呈され、いまだに決着がついていない状態に変わりはない。創設される賞に彼の名前を冠することは結局見送られ、他の名称を考えることになったが<sup>60</sup>、彼の実像については依然として議論の渦中にあるといつてよい。ここではこの論争的問題への深入りは避け、明確になっている事実を中心にリンゼの足跡を簡単に辿ることにしよう。

ヴァルター・リンゼは1903年に郵便局に勤務する事務職員の息子としてケムニッツで生まれた。父親の郵便局での職階は上位ではなかったといわれるが、はっきりしない。その地でリンゼは学校に通い、1924年にアビトゥアを取得した。ライプツィヒ大学では法律学と国家学を専攻し、7セメスターで早くも1927年に第1次法曹国家試験に合格した。したがって彼は少年期を第一次世界大戦とその後の混乱期に過ごし、相対的安定期に大学生活を送ったことになる。その後の司法研修生としての身分は恐慌の只中の1931年に第2次法曹国家試験に合格して終わった。法曹としてのリンゼの人生はザクセン州の司法官試補として、さらにライプツィヒでの補助裁判官として始まった。しかしヒトラーが政権についた1933年末に彼は公務から身を引いた。その理由はいまだに明らかになっていない。

公務から離れても、弁護士の仕事を始めたから、法曹としての職業をリンゼは続けたことになる。同時に彼は勉学にも励み、1936年にライプツィヒ大学で学位を取得した。1938年に彼の上に転機が訪れた。彼は故郷のケムニッツで商工会議所の職員になり、傘下の企業を監督する任に就いたのである。もしヒト

ラーが権力の座に就かず、また公的生活からのユダヤ人の排除が進められていなかったら、さらに1年後に戦争が勃発しなかったら、この職務にはとくに問題はなかったであろう。しかし企業を監督する立場から実際に彼が行ったのは、戦線の拡大で大量の兵士を必要とするようになった国防軍に人員を追加したり、乏しい資源を効率的に利用する方策を広めることだった。これは明白な戦争協力だったが、彼が担当したのはそれだけではなかった。リンゼの職務にはケムニッツ経済のいわゆる非ユダヤ化が含まれていたのである。ケムニッツでは繊維産業が盛んであり、ユダヤ人経営の多くがそれに従事していた。これに着目したナチスの指令の下、ユダヤ人財産のアーリア化という名目で国家的規模の収奪を進めるため、彼はユダヤ系市民の資産鑑定書の作成やユダヤ人経営を継承する企業と官庁との調整などの作業に当たったのである。さらに財産のアーリア化という事実上の略奪が片付いた後、全体戦争遂行に向けたケムニッツにおける労働力利用の調整を担当し、戦争捕虜やユダヤ人強制労働者の投入にも関与した。これらの事実を照らせば、リンゼがユダヤ人迫害に加担したことは否定できない<sup>9)</sup>。

けれども、他面で彼がユダヤ系市民を庇った事実があることも確認されている。例えば彼は特許を持つユダヤ人エンジニアを通訳として雇用することを試み、強制収容所送りになるのを阻止しようとした。そのために関係官庁に鑑定書を提出し、働きかけたのである。これはユダヤ人に対する同情心を疑われる行為であり、重い意味を有している。戦後になってリンゼは抵抗運動のメンバーだったという説が流れ、リンゼが拉致された後に亡命ユダヤ人がアデナウアーにリンゼ救出を訴える手紙を送り、リンゼがユダヤ人を守ろうとしたことを強調したのは、こうした事実に基づいている。この点を踏まえれば、リンゼがユダヤ人迫害の協力者だったことは間違いのないとしても、反ユダヤ主義とは一線を画しており、またナチ体制の同調者ではあっても、積極的な支持者だったとはいえないと考えられる。ただリンゼの場合には関与の度合いが一般の市民に比べて大きいことは見逃されてはならない事実といえよう。

第三帝国の瓦解に伴い、ケムニッツはソ連軍の占領下に置かれた。その故郷

の町でリンゼは引き続き商工会議所に勤務した。ここで彼は覚書を提出し、その中でユダヤ人財産のアーリア化を明確に不法だとする一方、補償の方針が定まるまでは返還することに反対する立場を表明した。その後、1948年までに彼は2回密告され、ナチ党の党員だったとされた。ソ連占領下の東ドイツ地域で密告は非ナチ化の名目で横行しており、実際にナチ活動家だった者ばかりでなく、個人的な怨恨などから密告されるケースが相次ぎ、人生の歯車が大きく狂った悲劇が多数発生したと考えられている<sup>10</sup>。この密告に対し、上司の圧力で入党の意向を示したものの、実際には党員になったことはないとリンゼは抗弁したが、その一方で、知人のフィッシャーという人物が戦時期にリンゼはナチ党に所属していたと証言した。しかしこの証言以外に疑惑を裏付ける証拠はなく、真偽のほどは怪しいと見られる。同様に、リンゼがブーヘンヴァルト強制収容所に入られていた一人のユダヤ人の救出のために身の危険を冒したとする文書も提出されたが、これもまた信憑性に乏しいと考えられている。

ともあれ、密告を受けてリンゼに関する調査が行われたものの、彼に有利な証言などがあったことから身柄の拘束には至らなかった。それどころか、彼は占領下の商工会議所で事務局長に昇進し、商工会議所が行う相談と指導の業務の非ナチ化を中心になって推進した。もっとも、その際に彼を長とする審査委員会はナチ体制に深くコミットした幾人かの人物に職務をそのまま継続する許可を与えたといわれている。彼が西ベルリンに逃亡したのは1949年6月だが、その時点までケムニッツ商工会議所事務局長の座にとどまった。ソ連の占領支配下では政治・行政ばかりでなく、産業界でも要職はSEDの党員によって占められたが、リンゼは最後までSED党員にはならなかった。入党しなければ出世の見込みはなく、また事務局長のポストにとどまる可能性も小さくなっていったと考えられるが、そうした事情に加え、ソ連占領軍を背に支配を強めるSEDとそれが呼号し農村で着手した社会主義建設に対する反感が手伝って、リンゼに西側への脱出を決意させたと推測される。いずれにせよ、リンゼはナチ支配の同調者だったことは否定できないが、第三帝国の崩壊を境にしてナチ独裁に代わったSED支配の同調者ではなかった。その意味では彼はSED支配

という狭義の共産主義に反対する人物だったといつてよい。しかし、それだけではなく、SED支配という現実であれ理念としての共産主義であれ、これまでの彼の人生にはそれらに対するコミットや共感は見出されないことも重要であろう。つまり彼は現実と理念の二重の意味で共産主義とは無縁な存在だったといえよう。

このようなリンゼの立場を踏まえれば、西ベルリンに移った後のリンゼの行動も理解できよう。最初、彼はある企業の法律顧問として働いた。しかし、1950年に自由法律家調査委員会（UFJ）に接触したことがシュタージの標的になる端緒になった。UFJは連邦全ドイツ問題省とアメリカの情報機関の財政的支援を受けて1949年に設立された団体であり、DDRにおける人権侵害などの不法を調べることを目的にし、証言や証拠を集める活動をしていた<sup>13</sup>。しかし、発足して間もないために組織が不十分であり、協力を依頼されたリンゼはこれを受け入れたのである。彼は法律顧問を辞してUFJの専門の職員になり、1951年に経済部門の責任者になった。DDRで暮らしている多数の協力者から経済に関する情報を集める一方、これを広く世に知らせて世論を啓発することが彼の新たな仕事だったのである。この仕事は秘密裏に情報収集する点ではスパイ活動に似ていたが、啓発の面ではジャーナリストと共通していた。またDDRで不法に財産を収用されたりした市民に助言を与える面では人権活動家に近似していた。1952年にはリンゼは西ベルリンで開催された国際法律家会議の準備を担当し、DDRにおける人権侵害を告発する先頭集団の一員として活躍したのである。

リンゼのこのような行動はDDRの側にはなによりもスパイ活動と映った。DDRでは多くの情報が秘密とされており、それらを収集すること自体が許されなかったからである。また、それらを公表して世論を喚起することは、DDRに対する不信や反感を煽り、建国間もないDDRの威信を損なうことにはかならず、共産主義を敵視する帝国主義の手先に等しい行為だと捉えられた。ソ連をモデルにして社会主義建設を進めていたDDRでは情報の公開性の原則がなく、人権保護の仕組みが欠落していたから、当局が隠蔽しておきたい情報



を明るみに出したり、権利を主張して政府の措置に逆らう行動にはすべて反共の烙印が押された。そればかりか、DDRの市民と接触を持つことは協力者網の構築につながり、破壊活動の拠点にもなりうると考えられたため、リンゼは危険人物として位置づけられたのである。無論、リンゼやUFJと接触したことが発覚したDDRの市民が見せしめ裁判などで裁かれ、厳罰に処されたことは指摘するまでもないであろう。

こうしてリンゼはDDRで国家の敵と見做された。彼はDDRの存立を脅かすだけでなく、社会主義建設を妨害する札付きの反共主義者、戦争を企む帝国主義勢力の走狗で平和の敵ともされたのである。UFJは一定の政治的影響力を持ち、これに対抗するためにシュタージはかなりのエネルギーを割かなければならなかったといわれるが、リンゼがシュタージによって抹殺の対象にされたのは、そうした文脈においてだった<sup>42</sup>。1952年7月8日の午前7時ごろ、西ベルリンのリヒターフェルデ地区にある自宅の近くでシュタージは誘拐を実行したのである。この朝、1人の男が彼に近づき、タバコの火を貸してくれと頼んだ。リンゼが鞆の中を探しているといきなり男は彼を殴打し、別の男が背後から彼を羽交い絞めにした。そして抵抗するリンゼの足をピストルで撃ち、負傷した彼をタクシーを装った車に押し込めた。通りかかった配送車の運転手が車を止めようとしたが失敗した。車はアメリカ地区を猛スピードで走り抜け、東ベルリンに消えたのである。

リンゼの拉致に対する反響は大きく、西ベルリンでは2日後に釈放を求める抗議集会がシェーネベルク区役所の前で開かれた。参加者は2万5千人に上ったといわれ、その数字だけでも事件の衝撃と怒りの大きさが推し量れよう。正式な選挙で選ばれたにもかかわらず、市長就任をソ連によって妨害されたことのある著名な西ベルリン市長エルnst・ロイターは拉致を激しく非難し、リンゼの解放を求めて世界の良心に訴えかけた。また事件後に再発を警戒して西ベルリンから東ベルリンとDDRに通じる通過点には車止めのバリケードが設置された。けれども、そうした抗議もDDRとソ連を動かすには至らず、リンゼは二度と西側には戻らなかったのである。

DDRに拉致された後、リンゼは1952年12月まで東ベルリンのホーエンシェーンハウゼンにあるシュタージの拘置施設で拘束された。その後、彼の身柄はのちにKGBの名前で恐れられたソ連の情報機関に引き渡された。引渡しが行われたのは、当時のシュタージにはソ連人が要所に配置されて指導に当たっており、重要なケースでは直接乗り出していたことが背景にあった。ギーゼケによれば、リンゼはその代表例と見做せるのであり、そうした関係に事実上の終止符が打たれるのはミールケの時代が始まった1958年になってからだった<sup>19</sup>。後の時期と違い、この頃の取調べは暴力が用いられたほか長時間に及んで睡眠を取らせないなどほとんど拷問に等しかった。そのため、困憊した彼は抵抗力を失い、DDRに対するスパイと破壊活動の罪状を認めた。1953年9月23日にソ連の軍事法廷はスパイ、反ソ宣伝、反ソ組織の建設の罪で彼に死刑を言い渡した。リンゼの身柄はモスクワに移送され、その地でソ連の最高軍事法廷が同年12月15日に死刑判決が妥当であるとの決定を下した。同日、刑務所でリンゼは銃殺に処され、遺体はドンスコエ墓地で焼却された。ドンスコエ墓地に眠る多くのドイツ人犠牲者と同じように、彼の遺灰はこの集団墓地に埋められたのである<sup>20</sup>。

こうしてリンゼはシュタージによる拉致とその後の殺害のためにDDRの国家犯罪の犠牲者として記憶されることになった。DDRの側から見れば彼が反共主義者に映るのは上述したとおりだが、仮にそれが事実だとしても、そのことを理由にして拉致したり殺害に及ぶことが西側の民主主義の価値基準に照らせば文字通り犯罪行為であることは指摘するまでもないであろう。またDDRにおける不法を調査し、それを公にする行為がDDRにとって不利益になるとしても、広い意味での人権保護の一環になるのも確かであろう。こうしてリンゼは人権を守るために戦い、拉致という非人道的な国家犯罪によって死に追いやられた犠牲者だという見方が西ドイツでは定着した。また一部では共産主義との戦いで非業の死を遂げた反共の殉教者のように描かれるようになった。その表れが、リンゼが暮らしていた通りがヴァルター・リンゼ通と改称されたことであり、あるいは最近になって彼の名前をとった賞を創設する動きが出て

きたことである。

しかし、賞にリンゼの名前を冠さないことで決着したことに見られるように、長く固まっていたリンゼ像には揺らぎが生じている。それはキルシュの研究によってナチ時代のリンゼの行動が明らかにされたためである。上記の略伝でも記したように、ケムニッツの商工会議所に勤務していた時期に彼はユダヤ人財産のアーリア化を担当し、さらにユダヤ人強制労働者の投入にも関与したことで、たとえ消極的ではあってもナチの協力者として振舞ったことが明るみに出たのである。リンゼに関するマンベルの著作ではそうした側面には触れられておらず、従来からのシュタージ犠牲者像が改めて強化される結果になっていたから、これを覆すキルシュに対して当然反論が加えられた。また、この論争を決着させるためにベストラインが鑑定書の作成を依頼されたが、それによってベストラインが論争に介入する形にもなった<sup>105</sup>。というのは、その鑑定に対してもキルシュが2007年11月2日付『ヴェルト』紙への寄稿の中で批判を加えたからである。このようにしてますます論議は人目を惹くようになったが、その焦点はキルシュの寄稿のタイトルである「DDR批判者かナチ犯罪者か」という点にあり、従来、ナチ時代のリンゼを不問に付してきたことが最大の論点として押し出されたのである。「ヒトラーが首相に任命されたとき、リンゼは29歳だった。UFJに加わったとき、彼は47歳だった。リンゼの人生の大部分であるこの18年を簡単に黙殺するわけにはいかない。しかし長く誰もこれを問わなかったのである。」こう述べてキルシュはナチ時代のリンゼについて、「要するにリンゼは犯罪者であり、ナチ独裁の支柱だった」と断定し、予想される反論を念頭において、「リンゼがナチではなく、レジームに距離を置いていたとか、ことによると慎重に抵抗したという間接証拠はずっと不明瞭である。とにかく、その証拠はどこにも存在しない」と主張したのである<sup>106</sup>。

こうした応酬を交えつつ、『ヴェルト』紙のいう「ヴァルター・リンゼに関する歴史家の論争」が現在も続いている。しかし、ここではそれに深入りする必要はなく、次の点を確認しておけば十分であろう。すなわち、仮にリンゼが「ナチ犯罪者」だったとしても、「DDR批判者」であることに違いはなく、そ

の活動の意義までがナチ時代の行動によって帳消しになるわけではないということがそれである。たしかに能動的ではなくてもナチ体制に協力したことは重い意味を持つ。けれども、他方では、DDRで社会主義の名において強権によって押し進められている不法に抗することにもやはり重要な意義がある。DDR批判者には多様な来歴があり、立場も保守主義者から共産主義者にまで跨るが、ここで重要なのは、そうした人びとの中でもリンゼが「DDR批判者」であったがゆえにシュタージの拉致の標的になり銃殺された事実である。この事実には今日では疑問の余地がなく、これがなぜ起こったのかという問いを中心にしてリンゼの実像をめぐる論争はなお続けられるものと思われる。しかし、その行方を追跡するのは他日を期すことにし、次に悲劇的な最期を遂げたいま一人の人物であるピアレクの検討に移ろう。

### 3. ローベルト・ピアレク

反共の闘士として、また人権を守る戦いで落命したことで知られてきたリンゼの生涯に関して新たな発見があり、これまでの理解に疑問が提起されたのと同様に、ピアレクについても、2008年にその最期に関する新たな知見が得られた。

シュタージによる拉致で命を奪われた人物として、ローベルト・ピアレクの名前も関係者の間ではよく知られている。ピアレクが西ベルリンから拉致されたのは1956年のことであり、それから40年以上経った1997年に実行犯の1人がベルリンの法廷で裁かれた。既に83歳の高齢に達した被告には執行猶予付きで10ヶ月の実刑が宣告されたが、この裁判を報じた1997年7月15日付『ベルリーナー・ツァイトゥンク』紙は「当時49歳だった人物の運命は拉致後暗闇に沈んだままである」と記し、見出しを「ピアレク事件、誘拐され東で消える」と付けている。また7月31日付の同紙によれば、判決では拉致の目的は「ピアレクを除去する」ことにあったとし、犯行が「国家保安省とDDR国家の存在に結びついていた」事実を認定する一方、「ピアレクは二度と再び現れなかった」

としてその消息が完全に途絶えたことを確認しているという。

ところが、2008年にそのピアレクについても新たな事実が掘り起こされた。西ベルリンから拉致された1956年に彼が死亡したことはこれまでも推測されていたが、どこでどのようにして死んだのかは明らかになっていなかった。例えば2005年12月にベルリンにあるテューリンゲン州代表部で彼を偲ぶ集会が開催されたが、その折の発表には「彼の早い死は今日まで解明されていない」としつつ、しかし死亡した場所はパウツェンだと説明されている。一方、別のピアレクに関する記事では死亡について疑問符を付した上で、1956年・ベルリンと記されている。この点に関し、ホーエンシェーンハウゼン記念館の歴史家エアラーが2008年にシュタージの文書を調べていて偶然一つの資料を発見し、新事実が浮かび上がった。それは拉致の当日にホーエンシェーンハウゼン拘置施設に引き渡された人物に関するものであり、通常ならば記載されている姓名がなく、番号だけが記入されていたのである。そこに記されている収容時刻から判断すると、その人物がピアレクであるのはほぼ確実であり、姓名がないのは死亡した状態で引き渡されたからだとエアラーは推定している。2008年4月8日付『ヴェルト』紙や『ベルリーナー・モルゲンポスト』紙が「シュタージ殺人が52年後に解明」などの見出しで報じ、4月13日にMDRがニュースで「ピアレクは恐らくシュタージ監獄で死亡」と伝えたように、この発見はマスメディアでも報道され、小さな話題になった。こうして2007年に論争とともにリンゼが甦ったのに続き、ピアレクの最期が判明したことにより、シュタージによる拉致と殺害というDDRの歴史の暗部に改めて光が当てられたのである。

それではピアレクというのはどのような人物なのであろうか。リンゼと同じく、簡単にその略歴などを眺めよう。

ローベルト・ピアレクは第一次世界大戦の最中の1915年にブレスラウで生を享けた。労働者家庭の6番目の子供であり、父親の失業と飲酒癖のために家庭は貧しかった。同地で中等学校を終えた後、商人としての職業訓練を受けたが、世界恐慌の荒波に翻弄される間に政治的関心を強めた。ヴァイマル共和国末期に14歳で彼はSPDの青年組織である社会主義労働者青年団(SAJ)のメンバー

になり、1931年には左翼の小政党である社会主義労働者党（SAP）に加わった。そこでは彼は防衛組織の若手リーダーとしてナチスの突撃隊と暴力沙汰を繰り返した。

ヒトラーの政権掌握後、彼は非合法活動を続けたが、組織は1934年に壊滅状態に追い込まれた。共産主義的青年層で頭角を顕していたピアレクは1935年に逮捕され、大逆を準備した罪で6年の懲役刑に処された。刑期を終えたあとも1943年まで保護検束されたが、結核で余命が短いというゲシュタポの医師の診断により釈放された。釈放されると直ぐに彼は非合法活動を再開した。けれども、反ヒトラーの抵抗グループを作ろうと試みたものの、成功しなかった。それどころか、ゲシュタポのスパイという疑いさえ招いたという。

敗戦を彼は潜伏していた故郷のブレスラウで迎えた。占領地でソ連軍が繰り広げた暴行や略奪行為も共産主義者となっていた彼の信念を覆さなかった。それどころか、彼は軍政部によってブレスラウの民生全権に任命されると同時に、占領軍の指導下に各地に設立された反ファシズム委員会の一員として活動した。ブレスラウを含むシュレージエンの支配権がポーランドに委譲されることになると、ピアレクは1945年7月に他の活動家の一団と一緒に先頭に赤旗を押し立てた列車に乗り込み、空爆で廃墟と化していたドレスデンに向かった。そこで彼はモスクワから帰国しザクセンにおける共産党（KPD）の重鎮となったドイツ人共産主義者H.マテルンの知遇を得た。マテルンはピアレクの情熱と才能を認め、その庇護を受けつつ共産黨員としてピアレクは重要なポストに就くようになる。

最初にピアレクが就任したのは、共産党の地区青年部書記のポストだった。この立場で彼は、自由ドイツ青年団（FDJ）の前身であるソ連占領地区中央青年委員会の委員長だったE.ホーネッカーと知り合った。1946年に自由ドイツ青年団がスタートするとホーネッカーは委員長に横滑りし、ピアレクはザクセンの自由ドイツ青年団委員長の座に就いた。またこの地位によって彼はザクセンの州議会議員を兼務するとともに、1946年に成立した社会主義統一党（SED）のザクセン州指導部の書記にもなった。同年に開催された自由ドイツ青年団の

大会ではビアレクは教会を批判する発言を行ったが、そこには信条をそのまま表に出す彼の率直で情熱的な性格が表出していて、慎重な立場のホーネッカーとの相違が既に明瞭になったといわれる。

1947年秋にビアレクはSED附属の党大学「カール・マルクス」で勉学するよう指示された。彼は有能だったが柔軟さに欠けたために、ザクセンのSED指導部はより利用価値を高めるように鍛える狙いからだった。ビアレクはそこで、いずれものちにDDRを脱出してその鋭い批判者として活躍することになるW.レオンハルトやH.ウェーバーと相識になった<sup>59</sup>。勉学を終えると1948年7月に彼に対してSEDから新たな任務が与えられた。将来のDDRの軍隊の中核になるべき人民警察特別部隊の政治的訓練を担当する責任者がそれである。このポストについては、文献によっては、DDR内務省の前身だったドイツ内務行政部の下の人警察総監と表現されている。いずれにしても、警察組織の頂上に位置するポストであることは間違いなく、成立過程にあるDDR支配体制の中核にビアレクが入り込んだのは確かであろう。彼を除くと、同格の主要なポストにはソ連亡命の経験者のような信頼度の高い人物が就いていたから、この人事にはマルテンの強い後押しがあったと見られている。

しかしながら、ビアレクがこの任務に着手したとき、訓練すべき人材に重大な問題があることが明らかになった。建設されるべき社会主義国家を軍事面から支えるべき人材の不足のために、政治的訓練を受ける者の中に戦争捕虜になって帰還した者やナチ党員だった者が含まれていたからである。そのために彼は報告書で人材確保の方法や人民警察の基幹的隊員の政治的信頼性を厳しく批判した。そこには上位の者に対しても遠慮会釈なく自分の信条や意見をぶつける尊大とも映る彼の性格が表れていた。その結果、彼はSED副議長ウルブリヒトをはじめとするSED上層部の不興を買うことになった。こうして早くも1948年10月に彼は政治的訓練の責任者ポストを解任され、一種の保護観察を受ける身となってグローセンハインに派遣された。そこでSEDの地区指導部の書記として活動するためである。この降格とともにそれまでのビアレクの目覚ましい政治的上昇は終わりを告げた。それどころか、後から振り返れば、グライ

ェクがいうように、ここで「彼の政治的没落が決定された」のである<sup>16</sup>。

グローセンハインに赴任した当時、ピアレクはまだ共産主義建設の理想に燃えており、SEDの政治路線から逸脱していたわけではなかった。そのことは、ドイツの分断が確定していく過程で彼が党の方針に忠実に従ったことから読み取れる。当時は西ドイツでの通貨改革に続いてベルリン封鎖が行われ、ドイツをめぐる米ソ関係の緊迫が高まる一方、東ドイツではソ連の占領統治下で大土地所有の解体が強権的に実施され、政治情勢は流動的だった。そうした中でグローセンハインの住民の動揺を沈静させ、SEDの支配体制を強固にするという新たな任務にピアレクは打ち込み、かなりの成果を挙げたといわれる。例えば土地改革で揺れる農民を集めた集会で大農に対する小農の経済的依存を除去する必要を説き、階級闘争のパートナーとして獲得するのに貢献したと評されている。また賠償として産業施設を撤去し、占領支配を続けるソ連についても、「ロシア人と我々」と題した講習会などを開催し、参加者は少なくとも親近感を抱かせるように努力したといわれる。その場ではソ連が東ドイツにトラクターやトラックなどを供与した事実を取り上げ、あるいは西側の戦争挑発者に対して平和を守る社会主義の盟主としての役割を説明したことが地元の新聞で報じられている。

グローセンハインにおけるピアレクの活動の頂点になったのは、1949年6月18日に開催された国民戦線を設立するための労働者集会だったとされる。その場で彼はSEDの政策を正しい意味でのブロック政策であり、ドイツの分断を阻止し、統一を守るのは労働者階級の任務であって、その先頭にSEDが立っていることを説いて、党の路線を忠実に宣伝した。この点から見て、地区の書記という降格人事にもかかわらず、ピアレクには共産主義建設への理想は一貫しており、またSEDの路線からの逸脱も認められなかった。

しかしながら、地区書記の時期にも上層部に対しても自分の信条を憚ることなく主張する性格は変わらなかった。そのため、降格に至ったSED中央の彼に対する不満は解消されないどころか、ますます嵩じていた。DDRが建国され、ドイツ分断が確定した直後の1949年11月にグローセンハインでSED地区



大会が開催されたが、その場で事前に組まれていた計画が実行された。中央ではピアレクをさらに下位のポストに落とすことが前もって話し合われ、そのための材料を集めることが決められていたのである。地区大会には中央からウルブリヒトと一心同体のクーンが参加したが、その場でピアレクは書記の座から外されることが決定された。予期せぬ解任の後、彼が得たのはパウツェンの自治体行政での職場だった。その後、機関車製造の人民所有企業で文化部門担当の管理職に就いた。こうして高位のポストから排除されただけではなく、政治に関わるポストから遠ざけられた末に最後の一撃が浴びせられた。1952年に彼はSEDを除名されたのである。

ウルブリヒトを中心とするSED上層部の不興を買っていたとはいえ、それがなぜSED除名という結末にまで至ったのかは明らかではない。とりわけ、降格された後も地域ではSEDの政治路線を忠実に代弁し、逸脱が認められなかったことを踏まえると、尊大で扱いにくいという性格面に問題があったとしても、公然たる上層部批判に及ばない限り、一般的には排除にまでは行かないと考えられよう。その意味で、SEDにおけるピアレクの航跡には不可解な部分が残るといわなければならないであろう。

このような処遇にもかかわらず、ノルマ引き上げに対する抗議に端を発する1953年6月17日の労働者の反乱にピアレクは参加しなかった<sup>99</sup>。この反乱は自然発生的であり、貧しい労働者家庭の出身であるピアレクはなにがしかのシンパシーを覚えたと思われが、彼は共産主義の理想を全面的には失わず、その限りで依然としてDDR国家の側に立っていたのである。あるいは支配する側に立った経験が、無計画で成算のない行動への参加を思いとどまらせたのかもしれない。建国から間もない大規模な反乱はDDRの屋台骨を揺るがし、ノルマ引き上げの撤回などの懐柔策が直ぐにとられたが、その一方で反乱が鎮圧された後に逮捕者が続出し、厳罰に処された。この弾圧の嵐は、反乱とは本来無関係のはずのピアレクにも及んだ。官憲の手が伸びるという知らせが届くと、不遇に耐えてきた彼は遂にDDRを脱出する決意を固めた。1953年8月23日に彼は家族とともに東ベルリンに向かい、その夜に西ベルリンへの境界線を越え

たのである。ベルリンが越境の場所に選ばれたのは、1952年5月のDDRの国境保全の決定によりドイツ内部国境と西ベルリン・DDR間の境界の監視が厳重になり、東西に分かたれたベルリンが東西ドイツ間に残された主要な抜け穴になっていたからであるのは指摘するまでもないであろう。

以前は戦争挑発者だと呼んで非難した西側に救いを求めたビアレクの行動は、一時的ではあれ人民警察の最高幹部だった経歴のある人物だっただけに、注目を集めた。彼と家族が収容されたのは、DDRからの逃亡者を受け入れる目的で1952年に開設された西ベルリンのマリーエンフェルデー一時収容所だった。そこではスパイの潜入を排除する目的もあり、DDRからのすべての逃亡者に対して事情聴取が行われたが、経歴の点からビアレクに対してはアメリカやフランスの諜報機関が強い関心を示し、反共プロパガンダに利用しようと試みた。そのうちでイギリスのそれだけは彼の資本主義批判を無視しなかったために協力関係が形成された。1954年にビアレクが提出したDDR向けのBBCの放送の改善提案はその表れである。そこではマルクス主義の理論と建設されつつある現実の社会主義との乖離が批判の対象になっており、その問題を含む彼のメモワールが『ビアレク事件』と題して1955年9月にロンドンで刊行された。

西ベルリンに逃れてから彼はまた、SPDのオストビュローを通じてDDR内のSED反対派を支援した。オストビュローというのはソ連占領下の東ドイツで1946年にSPDが共産党と強制統合されてSEDが創設された後、これに反対して西側に逃れたSPD党员を中心にして設立された組織である。その主要な任務は、DDRから逃れてきた難民やDDRで拘束されている政治犯とその家族の世話のほか、DDRにとどまり抵抗を続けている反対派に対する支援だった。そのための冊子が1万部以上DDRに運び込まれて撒かれたともいう。1955年5月以降、西ベルリンのSPDオストビュローでビアレクは専従の職員になり、ブルーノ・ヴァルマンという暗号名で働いた。DDRではオストビュローは反共主義者の巣窟と見做され、接触は厳禁されていたが、事務所がSEDの党员やDDRの政府機関と非公式のコンタクトを持っていたので、素性を秘匿するためである<sup>261</sup>。

しかし間もなくシュタージはビアレクが「階級敵の二つのセンター」で活動していることを突き止めた。SPDのオストビュローとBBC放送である。シュタージから見れば、ビアレクはDDRに背を向けた逃亡者であるだけでなく、敵を助ける裏切り者だったから、制裁措置が決定されたのは不思議ではない。だが、ビアレクの場合、経歴と対敵協力の二面が重なったため、制裁は最も重くなった。すなわち、西ベルリンから拉致した上で厳罰に処すということである。

この方針に沿い、オストビュローとの協力を装って西に潜入していた二人のスパイが1956年2月4日にビアレクをある集まりに招いた。そして酩酊したところで呼び寄せた車に彼を押し込み、東ベルリンに連れ去ったのである。明らかにしているのはここまでであり、その後の消息は完全に途絶えた。追跡調査を試みたヘルムスたちはビアレクが収容されたと考えられるパウツェン刑務所の1956年以降の資料を調べたが、手掛かりは得られなかったという。またシュタージの文書を管理するガウク庁でも調査を行ったが、成果はないままであった。

一方、ソ連が崩壊した後の1992年にモスクワからビアレク夫人に通知が届いた。そこにはビアレクがソ連の収容施設にいたことも、ソ連の法廷で有罪判決を受けたこともないことが記されていた。別稿でも論じたように、1950年代にはDDRでシュタージに拘束されたいわゆる政治犯で、ソ連に連行された上で処刑されたDDR市民が存在することが、モスクワのドンスコエ墓地に眠る死者の調査から明らかにされている<sup>99</sup>。上述したリンゼもその一人である。そうした事実を考慮すれば、ビアレクもソ連で最期を迎えた可能性も存在したが、この通知により、それも否定されたことになる。こうしてビアレクの姿は1956年に忽然と消えてしまっていたのである。

このような経緯に照らすと、2008年に至って彼の消息を知る有力な手掛かりが得られたことの意義は小さくない。確かに、そこで浮かび上がったのは、シュタージの拘置施設に到着した時点でビアレクが既に死亡していたということだけであり、したがって、彼がどのようにして死亡し、遺体はどうなったのか

などは依然として闇に包まれたままである。けれども、拉致から東ベルリンへの到着までの間に彼が自殺したとは考えにくい以上、シュタージによって殺害された公算が極めて大きい。この点はいまだ断定はできないとしても、西ベルリンで拉致され、東ベルリンの到着時点で死亡していた事実だけでも、シュタージの犯行の非人道性が鮮明になる。エアラーの見つけた資料はビアレクに関するものであることが確実視されているが、それが間違いなとすれば、シュタージによってこの世から消されたビアレクは半世紀以上を隔てて甦り、シュタージの犯罪の告発者として人びとの前に再び立ち現れたといえるのである。

#### 4. シュタージ拉致・殺害事件に関する若干の考察

近年、シュタージの復権とも呼べる現象が目立つようになってきている。これについては別稿ですでに指摘したとおりである。その代表例といえるのは、シュタージの幹部で「顔のない男」と呼ばれたマークス・ヴォルフの後任としてスパイ組織を率いた人物がある公の席でシュタージは平和の維持に貢献したと公言する一方、その犯罪行為には口を閉ざしたままでいたことであろう<sup>20</sup>。またそのヴォルフが2006年11月に死去した際、葬儀には多数のシュタージとDDRの関係者が集い、式典はさながら「没落した共和国のためのノスタルジックな国家行事」のような観を呈したといわれるが、シュタージの犯罪に関する反省の弁はひとつも聞かれなかったという<sup>21</sup>。さらに犯行に関わった者たちが裁判で罪を不問に付されるケースが増大し、「シュタージ犯罪者の遅まきの勝利」が語られるようになると同時に、他方で、シュタージの職員だった者たちが近年では連携して権利の回復を公然と要求するようになるなど復権を図る動きが公然化してきており、ホーエンシェーンハウゼン記念館の館長である既述のクナーベが新聞への寄稿で憂慮の念を表明するまでになっている<sup>22</sup>。例えば軍隊型組織を有したシュタージの元将校が現役当時の高い給与に照応するように年金給付の増額を求め、裁判に訴えているのも、復権の一例として挙げられよう<sup>23</sup>。それにとどまらない。自らシュタージによって拉致されDDRで服役

した経験のあるフリッケによれば、シュタージはその存在を正当化するために歴史の書き換えすら推し進めようとしており、ホロコースト否定論を中心とした歴史修正主義とは異なるもう一つの歴史修正主義が浮上しつつあるのが現状だといわれている<sup>98</sup>。例えば2008年にかつてのシュタージ幹部たちの手によって前年11月に開催された会議での報告を纏めた一書が公刊され、2008年5月30日付『フランクフルター・アルゲマイネ』紙でそれを取り上げたハンネマンが「老紳士たちの勝利の進軍」と評しているが、連携した活動の再開だけでなく、挑発的ともいえるシュタージの正当化は修正主義の一面だといえよう<sup>99</sup>。

このようにシュタージ復権の動きが顕在化している背景には、DDR時代の生活を懐かしむいわゆるオスタルジーが東ドイツ地域で広がっている現実がある。DDR最後の首相を務めたデメジエールはその原因を「DDRが作り上げたあらゆるものを我々が転換後に無差別に否定した」ことにあるとし、「それに対する反作用として無差別な美化が生じている」と指摘している<sup>100</sup>。一方、SED支配の先鋭な批判者として知られる演出家のクリーアは、『ヴェルト』紙への寄稿で「DDRを体系的に美化する策略が存在する」と喝破し、かつての教師たちがネットワークを作って活動していることなどが「DDRが年ごとにますます温和な光の中に現われる」事態を招いていると主張している<sup>101</sup>。これらの見方の当否はここでは借き、イデオが強調するように、オスタルジーを含むノスタルジーが全否定や全肯定ではなく、忘却を不可欠の構成要素とする「選択的な記憶」であることを確認しておけば足りる<sup>102</sup>。この選択の過程で否定的側面が抜け落ち、過去が美しく懐かしいものに作り変えられていくのである。

それはともあれ、上記のようなシュタージ復権の傾向を踏まえるなら、リンゼのナチ時代の経歴を中心にその評価をめぐる議論が戦わされ、あるいはビアレクの最期に関して闇に埋もれていた真実が明るみに出されたことの意義は軽視できないであろう。死亡にいたる経緯は違っていても、二人ともシュタージによる拉致の標的になり、その犠牲者である点では同じであり、美化されるようになりつつあるシュタージの闇の部分を変えて意識に上らせることになったからである。しかも、シュタージの被害にあった人びとのなかには、収容施

設での過酷な扱いのために異常を来たし、今日でも心理障害に苦しんでいる者が少なからず存在するばかりでなく<sup>91</sup>、最近ではシュタージの被害者が、かつて自分を苦しめたシュタージのスパイの名前が公になり、その所業が明るみに出されることを意図して報復行為に及び、裁判にかけられる事件すら発生している<sup>92</sup>。このような実情を考慮すれば、シュタージの暗黒を記憶にとどめておく意義は少しも減じてはいないといえよう。パウツェンにあるシュタージ記念館の館長がDDRに関する知識の欠如が問題視されている青少年にシュタージ拘置施設の見学を義務づける提案をし、連邦政府で東ドイツ問題を担当しているティーフェンゼー交通相（SPD）が学校でのDDR学習の強化を求めているのは<sup>93</sup>、そうした観点からにはかならない。

ところで、仔細に観察するなら、二人の事件からは興味深い特徴が浮かんでくる。リンゼは大学教育を受けた法律家であり、共産主義に対するシンパシーを最初から抱いていなかった。彼がDDRから憎悪されたのは、秘匿しておきたいDDRでの不法を暴き、その威信を損なうと同時に、破壊工作につながる協力者網の構築のようにみえる活動のゆえだった。DDRを支配する者には、SEDの信用や利益を害することはそのまま共産主義に対する敵対を意味したのであり、人権の保護はそれを覆い隠す単なる隠れ蓑にしかみえなかった。自由法律家調査委員会で活動するリンゼは反共のレッテルが貼られただけではなく、危険人物と見做され、そのために抹殺の対象にされたのである。

これに対し、労働者家庭の出身であるピアレクは共産主義の理想に燃え、SEDの党員としてDDRにおける社会主義建設にエネルギーを傾けた人物だった。一時は人民警察の幹部にまでなった彼が昇進の階段から転落したのは、上位の者に対しても自己の意見をいう行動ないし性格のゆえにSED幹部の不興を買ったためであり、決して反共産主義の立場に転じたり、SEDに対する忠誠を失ったことに原因があったのではなかった。その意味で、そうしたピアレクでさえDDRで暮らし続けることが不可能であり、西ベルリンへの脱出しか生きる道が残されていなかったところにスターリン主義化したSEDの硬直した構造が映し出されているといえよう。その結果、ピアレクは西ベルリンで

BBCやSPDに協力する形で、DDRにおけるSED支配を改革し、よりよい社会主義の実現のために努力するようになった。けれども、そのような活動はDDRの支配層から見れば共産主義に対する裏切りであり、背教でしかなかった。こうしてリンゼと違って共産主義の理想に背を向けたわけではないのに、ビアレクもまた拉致の対象にされ、命を奪われることになったのである。

このように二人は基本的立場が異なっているのであり、そのことはビアレクが一時期はDDRの高官だったために『DDRのフーズ・フー』に取り上げられているのに、反対派を通したリンゼが無視されているという取り扱いの相違にも反映されている<sup>96</sup>。そうした違いにもかかわらず、二人が拉致という共通の悲運に見舞われたことは、DDRに関する重要な事実を暗示しているように思われる。それはDDRが許容し、受け入れることのできる政治的主張やイデオロギーの範囲が極めて狭小だったことである。第三帝国が崩壊した後、ソ連占領地域にはいくつかの政党が誕生もしくは再生した。しかしDDRが建国されたあとには、周知のように、SEDが指導的政党としての地位を固め、そのほかの政党や大衆団体は伝導ベルトの役割に固定化されていったのである。こうして農業の集団化に代表されるように、強権を振りかざして上からの社会主義建設が進められていくことになったが、それは政治的空間の閉塞を招かざるをえなかった。クレスマンの表現を使えば、この閉塞は、「1950年代初頭、社会の全領域で強制と暴力をもって貫徹されたDDRのスターリン主義化」の帰結だったといえよう<sup>97</sup>。経歴も立場も全く異なる二人が等しく西ベルリンに逃れ、そこを拠点にした活動のためにシュタージの犠牲者になったことは、社会主義建設のそうした過酷さを反映していると考えられる。もちろん、同時期の「前線国家」西ドイツでも政党国家的民主主義は確立しておらず、「戦う民主主義」が文字通り戦闘的で不寛容だったことを見落としてはならない。ゴルツがいうように、「西側もまたイデオロギー的な負荷を帯びた友敵思考と内政上の非自由性に傾斜していた。反共産主義が若い連邦共和国の政治文化を刻印していたのである。」<sup>98</sup>

そればかりではない。二人の人生を重ねあわせてみると、DDRの支配層か

らその足元を脅かすと見られた活動がなぜ拉致を強行してまで排除しなければならぬほど危険に映ったのかがむしろ疑問に感じられよう。たしかにラジオ放送でDDRの汚点を暴き、DDR市民との人脈を作り、あるいはDDRで宣伝冊子を撒くことが、建国から日が浅く政治的基盤が安定しない状況では危険に感じられたのは当然であろう。しかしそれだけであれば、リンゼ拉致に対する大規模な抗議集会が示すように、拉致のような歴然たる不法はDDRに対する不信や敵意を強める結果になるので、政治的な損得勘定にあわないとも考えられる。

この点を考慮すると、強硬手段を発動するほどにDDR指導者が彼らの活動に神経を尖らせたのは、国家としてのDDRの存立が不確実だと判断していたためだと推察される。実際、1952年には「社会主義の建設」が宣言され、これに協力しない人々に対する弾圧が「階級闘争の強化」の名目で強められたが、そうした強権的措置に対して反撥が広がったのに加え、戦後復興から高度成長へと進む西ドイツに比べて配給制度が広く残るDDRでの暮らしの貧弱さは誰の目にも歴然としていた。「経済の奇跡の連邦共和国がソ連の恩寵によるウルブリヒトの灰色の国家よりも大抵のドイツ人に遙かに魅力的に映った」のはその当然の帰結にはかならない<sup>97</sup>。そのため、1950年代全般を通じてDDRからの逃亡者の波が止まらず、エンジニアや教師など社会の中核になるべき人びとが大量に西ドイツに脱出したので、DDRは存亡の危機から脱することができなかった<sup>98</sup>。事実、最後の強硬手段でリスクの大きい1961年のベルリンの壁の建設を俟ってようやくDDRは国家としての一応の安定を確保できるようになったのである。その意味で、リンゼやピアレクに限らず、1950年代にシュタージによる拉致事件がいくつも発生し、危険人物の排除に躍起になったことにはそれなりの理由があったと考えられる。死刑に処されたムラスとヴィルヘルムという無名の人物に別稿で焦点を当てた際にも触れたように、1950年代にはシュタージが関与したいわゆる政治犯の処刑が多く見られ、1952年から1955年までで62人が国家権力によって命を奪われたとされるが、そうした暴虐の根底にもやはり国家としてのDDRの存立の危機感があったといえよう<sup>99</sup>。無論、巨視的



な観点からすれば、米ソ間の冷戦に伴う東西ドイツの緊張関係の推移やスターリン批判を転機とするスターリン体制の緩和なども考慮に加える必要があるのは指摘するまでもないであろう。ともあれ、そうした背景の下で二人の人物の拉致と殺害が行われたのであり、このような非人道的な犯罪をステップにしてシュタージはミールケの下で膨張し、DDRの内部にミールケ帝国とも呼ばれる巨大組織を形成していくことになるのである。

#### 注

- (1) Jens Gieseke, Das Ministerium für Staatssicherheit 1950 bis 1989/90, Berlin 1998, S.9ff.日本人の手になるシュタージ関係の著作として、桑原草子『シュタージの犯罪』中央公論社、1993年、関根伸一郎『ドイツの秘密情報機関』講談社、1995年があるが、いずれも発展という視点は見られない。またDDRが「他人を監視し、他人から監視される社会」だったのは事実としても、非公式協力者つまり「一般市民の情報提供者は300万人から500万人に及ぶ」というのは、最大で1800万人の人口だったことを考えただけでも誇張といわねばならない。関根、同書、189頁。
- (2) Benedict Maria Müller, Walter Linse - Umstrittener Namensgeber, in: Klartext vom 5.12.2007.; ZDF-Aspekte vom 25.11.2005.フリッケに依拠して後述するキルシュも600人から700人としている。Benno Kirsch, Walter Linse 1903 -1953 -1996, Dresden 2007, S.8.なお、政府犯罪・統一犯罪中央捜査グループ（ZERV）は総数で580件の拉致を確認している。拙稿「ベルリンの壁・ドイツ内部国境の越境者問題」『社会科学論集』46号、2008年、205頁。
- (3) 例えばリンゼが記憶されていることは、拉致から55年たった当日にドイツ・ラジオが「55年前にシュタージが西ベルリンの法律家ヴァルター・リンゼを拉致した」とのリードを付けて事件を放送していることから明らかであろう。Kirsten Heckmann-Janz, Todesopfer im Kalten Krieg, Deutschlandfunk-Kalenderblatt vom 8.7.2008.
- (4) Siegfried Mampel, Entführungsfall Dr. Walter Linse: Menschenraub und Justizmord als Mittel des Staatsterrors, Berlin 1999; Kirsch, op.cit.
- (5) Michael Herms und Gerd Noack, Aufstieg und Fall des Robert Bialek, Berlin 1998.ただし、後で触れるクリアアがピアレクに関する小論を執筆しているが、目新しい点は認められない。Freya Klier, Robert Bialek, in: Karl Wilhelm Fricke, Peter Steinbach und Johannes Tuchel, hrsg., Opposition und Widerstand in der DDR,

München 2002, S. 210-215. なお、フリッケなどが編者となったこの書では、ピアレクはハーヴェマン、ヤンカなどとともに「SEDの党内反対派」の一人として位置づけられている。

- (6) Historische Kommission: Walter Linse als Namensgeber für einen Aufarbeitungspreis ungeeignet, Pressemitteilung der SPD 569/07
- (7) Pressemitteilung von Gesine Löttsch, Hubertus Knabe schadet der Aufarbeitung der DDR-Geschichte. 26.9.2007. なお、賞をめぐる問題については、『シュビーゲル』も「ヴァルター・リンゼ賞: 名付け親のナチの過去が紛争を引き起こす」との見出しで報道している。Der Spiegel, Nr. 30, 2007, S. 15.
- (8) Die Welt vom 7.12.2007. 賞の名称は、最終的に「ホーエンシェーンハウゼン賞」とすることで決着した。Förderverein Gedenkstätte Berlin-Hohenschönhausen, Presse-Information vom 18.6.2008.
- (9) ユダヤ人財産のアーリア化に関しては、戦後の返還・補償問題を含め、武井彩佳『ユダヤ人財産はだれのものか』白水社、2008年参照。
- (10) その若干の事例がプラトーによって検討されている。Alexander von Plato, Denunziation im Systemwechsel: Verhaftete, Deportierte und Lagerhäftlinge in der SBZ um 1945, in: Historical Social Research, Vol. 26, No. 2, 2001.
- (11) 自由法律家調査委員会に関しては、Siegfried Mampel, Der Untergrundkampf des Ministeriums für Staatssicherheit gegen den Untersuchungsausschuss Freiheitlicher Juristen in Berlin (West), Berlin 1999参照。
- (12) Ehrhart Neubert, Geschichte der Opposition in der DDR 1949-1989, Berlin 1997, S. 94.
- (13) Jens Gieseke, Die DDR-Staatssicherheit: Schild und Schwert der Partei, Bonn 2000, S. 15f, 31f.
- (14) ドンスコエ墓地に埋葬されているドイツ人犠牲者については、Arsenij Roginskij u.a., hrsg., Erschossen in Moskau. Die deutschen Opfer des Stalinismus auf dem Moskauer Friedhof Donskoje 1950-1953, Berlin 2005参照。
- (15) Klaus Bästlein, Zur Rolle von Dr. Walter Linse unter der NS-Herrschaft und in den Nachkriegsjahren bis 1949, Berlin 2007.
- (16) Benno Kirsch, DDR-Kritiker oder NS-Täter? Ein Leben in beiden deutschen Diktaturen: Im Streit um Walter Linse helfen Pauschalisierungen nicht weiter, in: Die Welt vom 2.11.2007.
- (17) レオンハルトは邦訳のある『戦慄の共産主義』や『岐路に立つ共産主義』などの著者として共産主義体制の内幕を暴いたことで著名である。一方、ウェーバーはやはり邦訳されている『ドイツ民主共和国史』の著書をはじめ、ドイツ共産党に関する

る歴史研究などで知られている、DDRを中心としたドイツ現代史の代表的な研究者である。

- (18) Rainer Grajek, Der verschwundene Parteisekretär, <http://www.rainergrajek.de/riesa-grossenhain/> 2
- (19) 1953年6月17日に発生した労働者の反乱に関しては多数の研究がある。日本語文献としては、星乃治彦『社会主義国における民衆の歴史』法律文化社、1994年。
- (20) SPDのオストビュローについては、Wolfgang Buschfort, Das Ostbüro der SPD: Von der Gründung bis zur Berlin-Krise, München 1991参照。なお、1959年初頭にオストビュローの再編をSPD幹部会から託されたクキルが数日後に変死したが、シュタージによる毒殺の可能性が指摘されている。
- (21) 拙稿「東ドイツ（DDR）の政治犯について—1950年代初期の二つの事例」『社会科学論集』45号、2007年参照。
- (22) 拙稿「ベルリンの壁・ドイツ内部国境の越境者問題」『社会科学論集』46号、2008年、215,219頁参照。なお、Uwe Müller, Mielkes Genossen, in: Die Welt vom 4.6.2007.; Otto Langels, Vom Problem des öffentlichen Umgangs mit Ex-Stasi-Offizieren, in: Deutschlandfunk-Hintergrund vom 28.7.2007も参照。
- (23) 拙稿「マックス・ヴォルフとドイツ現代史」『社会科学論集』45号、2007年、215頁。
- (24) Uwe Müller, Der späte Triumph der Stasi-Täter, in: Die Welt vom 21.4.2008. Hubertus Knabe, Stasi-Spitzel fordern Persönlichkeitsrechte ein, in: Die Welt vom 10.11.2008.なお、かつてのシュタージ職員たちが今日でも結束を維持している様子については、ノルテの詳しいルポがある。Barbara Nolte, Die Stasi-Rentner, in: Die Zeit, Nr.30, 2006.
- (25) Die Welt vom 3.12.2008.
- (26) Karl Wilhelm Fricke, Geschichtsrevisionismus aus MfS-Perspektive: Ehemalige Stasi-Kader wollen ihre Geschichte umdeuten, in: Deutschland Archiv, Jg.39, H.3, 2006, S.490ff.
- (27) Matthias Hannemann, Mitschriften aus Odensee, in: Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 30.5.2008. 公刊された本は、Hauptverwaltung A: Geschichte, Aufgaben, Einsichten, Berlin 2008である。
- (28) Die Welt vom 3.8.2008.
- (29) Freya Klier, Der lila Drachen und die Mär von der schönen DDR, in: Die Welt vom 15.12.2008.因みに、ザイルスはクリーアを「DDRにおける国家の敵No.1」だったと呼んでいる。Christoph Seils, Zwischen Neuseeland und Gysi, in: Frankfurter Rundschau vom 10.3 2005

- (30) Robert Ide, Aus DDR-Biografien kann der Westen lernen, in : Der Tagesspiegel vom 30.11.2008.記憶の選択性の問題は夙のフリッツェが重視していた点である。拙著『統一ドイツの変容』木鐸社、1998年、137頁以下参照。
- (31) Matthias Klampe, Psychische Störungen nach politisch motivierter Haft, in : Andreas Wagner u.a., Politische Strafjustiz 1945-1989, Schwerin 2008, S.106ff.心理障害の生々しい例につき、Eva Eusterhus, Ein Stasi-Opfer spricht über die Leiden der Haft, in: Die Welt vom 7.11.2008.シュタージの拘置施設での扱いの過酷さは、施設を見学すれば容易に想像がつく。今日まで保存され一般に公開されている施設では、ホーエンシェーンハウゼンのほかにパウツェンのそれがよく知られており、ハレやポツダムのそれも見落とせないが、それらに備えられている運動スペースや懲罰房の構造自体が暴虐の極みといえる。なお、施設とそこでの扱いの詳細につき、ホーエンシェーンハウゼンの場合は、Hans-Eberhard Zahn, Haftbedingungen und Geständnisproduktion in den Untersuchungs-Haftanstalten des MfS, Berlin 2005が役立ち、パウツェンの場合では次の書が有益である。Stiftung Sächsische Gedenkstätten zur Erinnerung an die Opfer politischer Gewaltherrschaft, hrsg., Spuren, suchen und erinnern, Leipzig 1996.; Karl Wilhelm Fricke und Silke Klewin, Bautzen II: Sonderhaftanstalt unter MfS-Kontrolle 1956 bis 1989, Leipzig 2001.
- (32) Steffen Wintner, Dresdner Ikarus, in: Der Spiegel vom 24.11.2008.
- (33) Die Welt vom 6.8.2008. ; Die Zeit vom 31.12.2008.ただ2008年9月のバイエルン州における州議会選挙戦で苦戦が伝えられるCSUがSPDと左翼党とを分断するためにシュタージ被害者を引っ張り出しているのは問題が残る。Der Spiegel vom 28.8.2008.
- (34) Helmut Müller-Enbergs u.a., hrsg., Wer war wer in der DDR?, Berlin 2000, S.75.反対にリンゼの写真と略歴はモスクワでのドイツ人犠牲者の書に載せられている。Roginskij u.a., hrsg., op.cit., S.250.; Jörg Rudolph u.a., hrsg., Hingerichtet in Moskau: Opfer des Stalinismus aus Berlin 1950-1953, Berlin 2007, S.107.
- (35) クリストフ・クレスマン、石田勇治・木戸衛一訳『戦後ドイツ史』未来社、1995年、17頁。なお、ヘルマン・ヴェーバー、斉藤哲・星乃治彦訳『ドイツ民主共和国史』日本経済評論社、1991年、57頁参照。例えば同時期に教育面では、「ソ連を模範として仰ぎつつ社会主義愛国心を中心としたイデオロギー教育を国家の統一的な教育の核とする」という政策」が推進された。近藤孝弘『ドイツの政治教育』岩波書店、2005年、126頁。
- (36) Hans-Georg Golz, Editorial zur “politischen Kultur im kalten Krieg”, in : Aus Politik und Zeitgeschichte, 1-2/2009, S.2.この点についてはさらに、ハンス・カール・ルップ、深谷満雄ほか訳『現代ドイツ政治史』彩流社、2002年、187頁以下、

ハインリヒ・アウグスト・ヴィンクラー、後藤俊明ほか訳『自由と統一への長い道 II』昭和堂、2008年、165頁以下参照。因みに、クロイツベルガーによれば、「戦後ドイツの反共産主義の歴史を代表する」だけでなく、国内で「冷たい内線」を推進したのが、西ドイツ建国に伴って設置された連邦全ドイツ問題省である。Stefan Kreuzberger, Das BMG in der frühen Bonner Republik, in: Aus Politik und Zeitgeschichte, 1-2/2009, S.27f.

(37) Golz, op.cit., S.2

(38) その詳細に関しては、拙著『統一ドイツの外国人問題』木鐸社、2002年、427頁以下参照。

(39) 前掲拙稿「東ドイツ（DDR）の政治犯について」178頁参照。